夭折の天才ギタリスト、ジミー・マカーロック
—ポール・マッカートニーの光と影で—

平野 恵美子

はじめに

おそらく史上最も有名なロック・バンドであるビートルズ(The Beatles)のメンバーの１人だったポール・マッカートニー(Paul McCartney)は、バンドの解散後、２枚のソロ・アルバムを経て、ウィングス(The Wings)という新バンドを結成した。ファースト・アルバムは 1971 年の暮れに発表された「ワイルド・ライフ(Wild Life)」である。ビートルズ解散後の活動の初期においては、やや荒削りな制作内容に評論家の批評も厳しかったが、持ち前の実力によって、次第に大きな成功を収めていった。実際、マッカートニーは、ビートルズ在籍時の主要なポジションであるヴォーカル、ベースの他に、アルバムで使用される楽器の全てを自分で演奏できる実力派で、また数々のヒット曲を見れば、20 世紀の最も偉大な作曲家の１人であると言っても決して過言ではないだろう。71 歳になった今日に至るまで、新作を発表し、精力的に活動を続けており、ビートルズ解散後、最も成功した息の長い元メンバーと呼ぶことができる。特に今年 2013 年は、ウィングス最盛期の米国ツアーを映画化した「ロックショウ(Rockshow)」の、37 年ぶりのリマスタリング版世界同時上映（6 月）と CD 及び初 DVD のリリース（5 月）、新作アルバム “NEW”の発表（10 月）、そして世界ツアーの一環として 11 年ぶりの来日公演があった（11 月）。特にライヴ公演はその質の高さが話題になり、最終日の 21 日にはチケットを持たないファンが東京ドームの外に溢れかえるほどで、あらためてマッカートニーの人気と実力の程を見せつけることになった。

だが本論文の中心はこの偉大な元ビートルにあるのではない。マッカートニーの活動については、既にビートルズ、ウィングス、ソロ活動を通じて、アマチュア書から専門的な研究書に至るまで膨大な書籍が著され、CD や DVD などの音楽映像資料も枚挙に暇がない。筆者が個人的に、とりわけマッカートニーのファンであることは否定しないが、本論文では、ウィングスの元メンバーのジミー・マカーロック(Jimmy McCulloch)というギタリストを考察の対象として取り上げる。マカーロックは人気・実力を兼ね備えた素晴らしいギタリストだったが、若くして亡くなり（享年 26 歳）、音楽誌等でマッカートニーやウ

ィングスに関する記事の中で触れられることはあるものの、彼１人を対象にした論文や書籍は、筆者の知る限り現時点では存在しない。本論文では、この音楽史に埋もれた夭折の天才ギタリストの生涯と業績を、初めて詳細に整理・紹介しつつ、マッカートニーというあまりにも偉大なミュージシャンと共に活動することの意味と影響について考察したい。マカーロックという音楽家が同時代にどのように受容されていたか知るために、主要な資料として『メロディー・メーカー(Melody Maker)』等、1970 年代の英国音楽誌の記事を多く用いる。なお筆者の本来の研究領域は、ロシア・バレエを中心にした舞踊文化研究ということになっているが、あらゆるパフォーミング・アーツは研究対象となり得、最近では特にウダイ・シャンカール(Uday Shankar)というインド人舞踊家に関心がある。ウダイ・シャンカールは、2012 年 12 月に他界した世界的なシタール奏者、ラヴィ・シャンカール(Ravi Shankar)の長兄である。ラヴィ・シャンカールは主としてジョージ・ハリソン(George Harrison)によって欧米に紹介され、70 年代ヒッピー文化におけるインド表象普及の一端を担った。もっとも、シタールやインド音楽を積極的に自分の曲に取り入れたハリソンと違って、マッカートニーは旋律的にも主題的にもエスニックなものにあまり関心がないように見え、その意味で彼は、ポピュラー・ミュージックにおける伝統的なヨーロッパ白人音楽の正統な継承者と位置づけることができるだろう。

ウィングスについて

ウィングスの活動は今回の論文の主要部分を占めるものではないが、簡単に紹介しておく。ウィングスのメンバーは流動的だったが、ポール・マッカートニー、ポールの妻のリンダ・マッカートニー(Linda McCartney、以下「マッカートニー」はポール・マッカートニーを指し、リンダ・マッカートニーは「リンダ」とする)、英サイケデリック・バンド、ムーディ・ブルース(Moody Blues)の元メンバー、デニー・レイン(Denny Laine)の３人は、バンド結成時から解散まで一貫して変わらぬ主軸メンバーだった。主な担当楽器は、マッカートニーがヴォーカルとベース、リンダがキーボード、レインがリズム・ギターだが、マッカートニーとレインは何でもこなすマルチ・プレーヤーで、曲によって担当楽器が変わり、元々はミュージシャンでなかったリンダのキーボードをサポートすることもあった。最初期のメンバーはこの３人の他に、ドラムスにデニー・シーウェル(Denny Seiwell)、リード・ギターにヘンリー・マッカロー(Henry McCullogh)がいた。マッカローは、ウィングスの代表曲の一つ「マイ・ラヴ(My Love)」（アルバム「ヴィーナス・アンド・マース(Venus and Mars)」に収録）でギター・ソロの名演を残している。程なくして 1973 年 9 月、新アルバム録音のためナイジェリアに向けて出発前日、シーウェルとマッカローが脱退する。

ウィングスの代表作となるアルバムの一つ「バンド・オン・ザ・ラン(Band on the Run)」は、マッカートニー、レイン、リンダの3人で録音され、1973年12月にリリースされた。シーウェルとマッカローの後を受けて、1974年にウィングスに参加したのが、ジェフ・ブリトン(Geoff Britton)とマカーロックである。後述するが、マカーロックは当時、英国ではある程度知られるギタリストになっていたが、所属バンドを転々とし、大きなヒットに恵まれておらず、スタジオ・ミュージシャンとしても他アーティストのセッションに参加していた。そういった仕事の一つとして、リンダやマッカートニーの弟のマイク・マクギア(Mike McGear)のソロ作品の録音に、セッション・ギタリストとして参加したところ、マッカートニーにその腕前を認められ、ウィングス参加の運びとなった。マカーロックは当時まだ21歳だった。マッカートニー、レイン、リンダ、ブリトン、マカーロックの5人で録音して最初にリリースされたシングル曲は、「ジュニアズ・ファーム(Junior's Farm)」で、ハード・ロック調のマカーロックのギター・ソロがフィーチャーされている。またこの時の録音作業の模様は、「ワン・ハンド・クラッピング(One Hand Clapping)」というタイトルでテレビ放映されたものが、後にDVD化されている。

ジミー・マカーロックの音楽歴

ジェームズ・「ジミー」・マカーロック(James "Jimmy" McCulloch)は、1953年6月4日、スコットランドのダンバートン(Dumbarton)で生まれ、クライドバンク(Clydebank)、カンバーノールド(Cumbernauld)で幼少期を過ごした。最初のギターを手にしたのは10歳半の時だが、本人のインタヴューによると4歳の頃からギターを弾きたいという願望があり、本物のギターを手にする前はボール紙でできたギターを持っていたという。[i]ドラマーで兄のジャック・マカーロック(Jack McCulloch、以下「ジャック」)によると、家族は音楽一家で、父親はトランペット奏者、祖父はサイレント映画の伴奏者だった。[ii]特に教師にはつかず、"The Ivor Mairants Book of Exercises"というギター教本でコードの練習をした。[iii]11歳の時、兄のジャック、地元の少年らとジェイガーズ(The Jaygars)というバンドを結成し、グラスゴーを中心に活動、大物バンド公演のオープニング・アクトを務める。この頃、ザ・フー(The Who)のピート・タウンゼント(Pete Townshend)と知り合った。ジェイガーズはワン・イン・ア・ミリオン(One in a Million)に名称を変更し、1967年に"Use Your Imagination/Hold On"と"Fredereek Hernando/Double Sight"の2枚のシングルをリリースした。これらの曲は2008年にリリースされたアルバム"One in a Million: Double Sight, The Complete Recordings"に収められており、60年代後半的ドラッグ文化とサイケデリック色濃いサウンドになっている。ワン・イン・ア・ミリオンは経済的に存続が難しくなり、ロ

ンドンに移ったマカーロックは、タウンゼントに再会し、[iv]サンダークラップ・ニューマン(Thunderclap Newman)への参加を勧められた。サンダークラップ・ニューマンは、タウンゼントが「ビジュー・ドレインズ(Bijou Drains)」という偽名でプロデュースならびにベーシストとして参加したグループで、正式なメンバーは、マカーロックの他に、ヴォーカルのジョン・「スピーディ」・キーン(John "Speedy" Keen)、キーボードのアンディ・「サンダークラップ」・ニューマン(Andy "Thunderclap" Newman)の３人である。この他にプロモーション・ビデオでは、マカーロックの兄であるジャックがドラムスを叩いていたり（スタジオ演奏版)、ジム・ピットマン=エイヴリィ(Jim Pitman-Avrey)が演奏していたりするのを確認できる。1969 年発表のシングル曲"Something in the Air"（邦題「革命ロック」）は英国で No.1 ヒットとなり、[v]15 歳のマカーロックは「英国 No.1 シングル曲でリード・ギターを弾いた最年少のギタリスト」として、一躍その名を知られるようになった。この曲は、1969 年のピーター・セラーズの映画「マジック・クリスチャン(Magic Christian)」（リンゴ・スター(Ringo Starr)も出演）や「いちご白書(The Strawberry Statement)」(1970)で使用され、曲の知名度を上げる一助となった。キャッチーなメロディー、ニューマンのサイケデリック感強いピアノ演奏と共に、ダブルトラックによるマカーロックのリード・ギターは、おおらかで伸び伸びとした音色で、後の演奏で聞くことができるような高度な複雑さは少ないものの、強い印象を残している。

サンダークラップ・ニューマンの活動は、主にスタジオで行なわれ、シングル曲が先行し、アルバム「ハリウッド・ドリーム(Hollywood Dream)」がリリースされたのは、"Something in the Air"の発表から１年以上経った 1970 年 10 月だった。間もなくバンドは解散する。マカーロックによれば、３人の中心メンバーに共通点は無く、当初はそれぞれ別のプロジェクトだったが、タウンゼントが全部の面倒を見ることができず、一つのグループにしたのだった。[vi]また、マカーロックは、スタジオでの作業よりライヴ活動の方をはるかに好んでおり、[vii]バンドの解散は自然な流れだった。しかしタウンゼントとの関係は良好だったようで、後にマカーロックは、ロジャー・ダルトリー(Roger Daltrey)やジョン・エントウィッスル(John Entwistle)ら、ザ・フーのメンバーのソロ・プロジェクトにたびたび参加している。

サンダークラップ・ニューマン解散後しばらくは、大きな成功に恵まれず、他のアーティスト達とのセッションが続いた。この時期、注目に値するのは、スティーヴ・エリス(Steve Ellis)やジョン・メイオール(John Mayall)のバンドへの一時的な参加である（1971 年)。特に後者は、「ジョン・メイオール学校(John Mayall School)」と呼ばれ、エリック・クラプトン(Eric Clapton)、ミック・テイラー(Mick Taylor)、ピーター・グリーン(Peter Green)ら、偉大なギタリストを数多く輩出し、マカーロックも大きな影響を受けた。この時のマ

カーロックの演奏も高い評価を受けている。[viii]マカーロックによると、メイオールのバンドへの参加は、ジミ・ヘンドリックス(Jimi Hendrix)のマネージャーで、元アニマルズ(The Animals)のベーシストだったチャス・チャンドラー(Chas Chandler)の紹介によるものだった。メイオールは当初、クラプトンかグリーンを希望していた。マカーロックのスタイルは、「ブルース／ハード・ロック」と位置づけることができるが、ジョン・メイオール・バンド以前、ブルース・バンドで弾いたことが無く、自分の方向性を見つけるのに役に立ったと語っており、このバンドでの影響の大きさを窺い知ることができる。[ix]

メイオールのツアーへの参加と同時期に、マカーロックは実兄のジャックらと、ベント・フレーム(Bent Frame)というバンドを結成している。バンド名は後に、ジミー・マカーロック・バンド(Jimmy McCulloch Band)に改名された。録音は残されているが、メジャー・レーベルでのリリースは果たさなかった。

マカーロックが次に参加したのは、レッド・ツェッペリン(Led Zeppelin)のマネージャーだったピーター・グラント(Peter Grant)に認められてデビューし、英国ではその名を知られていたブルース・バンド、ストーン・ザ・クロウズ(Stone the Crows)である。ジャニス・ジョップリン(Janis Joplin)を彷彿とさせる風貌とパワフルなヴォーカルが持ち味のマギー・ベル(Maggie Bell)を中心としたグラスゴー出身のバンドだが、1972 年 5 月、ギタリストのレス・ハーヴェイ(Les Harvey)が機材のチェック中に感電死してしまうという不幸に見舞われた。レス・ハーヴェイはアレックス・ハーヴェイ(Alex Harvey)の弟である。亡くなったハーヴェイの後を受けて加入したのがマカーロックだった。オーディションが行なわれたのだが、マカーロックの演奏を聞いた後、メンバーはもう他の参加者の演奏を聞かなかった。[x]19 歳になるかならないかのマカーロックの演奏はそれほど素晴らしく、メンバーに感銘を与えた。ライヴでの演奏も高い評価を受け、「いずれこのバンドと共に、彼はギタリストとしてスーパースターの地位に辿り着くだろう」と評された。[xi]

ストーン・ザ・クロウズにおけるマカーロックの在籍期間は短い。翌 1973 年 6 月にベルがソロ・キャリア追求のため脱退、続けてマカーロックも辞め、バンドは自然消滅してしまう。しかし様々な意味で、マカーロックのキャリアで、ウィングスに劣らず重要なバンドと言えるだろう。まずベル以外の個々のメンバーも非常に高い演奏技術を持っていた。バンドの最後のアルバムとなった“Ontinuous Performance”(1972)はマカーロックの加入前にほぼ完成しており、彼は“Good Time Girl”と亡くなったハーヴェイに捧げられた“Sunset Cowboy”の録音で演奏しただけだった。だがマカーロック加入後に収録されたテレビ番組のライヴ映像“Beat Workshop”が DVD 化されており、ここではこのバンドの水準の高さを十分堪能することができる。中でもマカーロックのギターがフィーチャーされており、年齢的にも一回り上のオリジナル・メンバー達に一歩もひけを取らない成熟した演奏を見せ

ている。とりわけ“Penicillin Blues”でリードを取るイントロと、“Niagara”のソロの変則するリズムとテンポは素晴らしく、ベテランの領域と言っていいほどである。12 ビート（4 小節×3）の曲の演奏は、ポップス／ロック調だったサンダークラップ・ニューマンの頃から明らかに進歩しており、メイオール学校で培われたセンスと技術が感じられる。またウィングスの「ロックショウ」でも見られるワウ・ペダル(Wah-wah pedal)の使用が確認できる。

ドラムスのコリン・アレン(Colin Allen)、キーボードのロニー・リーヒ(Ronnie Leahy)、ベースのスティーヴ・トンプソン(Steve Thompson)らとは、メイオール・バンドでも共演しており、ベルの脱退後も気心の知れたメンバーによるバンド存続の動きはあったが、結局続かなかった。しかしバンドの解散後もメンバーとの協力関係が続き、アレンとは、ウィングスのアルバムに収録されたマカーロックのリード・ヴォーカル曲を共作した（マカーロックが作曲、アレンが作詞）。またマカーロックが生涯の最後に在籍したバンド、デュークス(The Dukes)にはリーヒも参加している。マカーロックはストーン・ザ・クロウズ解散前にバンドのためにいくつか曲を書いていたと語っており、ウィングスの「メディシン・ジャー(Medicine Jar)」はそのうちの一つである。[xii]

ストーン・ザ・クロウズの後、マカーロックはブルー(Blue)、ツンドラ(Tundra)というバンドにいずれも短期間だけ在籍する。これらのバンドでの活動は特に印象に残るものではないが、ブルーのシングル曲の「リトル・ジョディー(Little Jody)」は、チャートでヒットするには至らなかったものの、マカーロックのリード・ギターがフィーチャーされ、明るく軽快なギター・リフを堪能できる。

マカーロックのストーン・ザ・クロウズ脱退やブルー加入のニュースは音楽誌でも大きく取り上げられ、当時注目されていたギタリストだったことがわかる。[xiii]しかしウィングス加入後は、マカーロック個人がニュースの話題に取り上げられることは極端に少なくなり、常にウィングスまたはマッカートニーのニュースの一部として扱われ、ウィングス脱退後も「ウィングスの元ギタリスト」という名称が、亡くなるまでマカーロックについて回った。

ウィングス・オーヴァー・アメリカ／マッカートニーとマカーロックの音楽性

マカーロックのウィングス加入の経緯は先述の通りである。1975 年、ブリトンが脱退する。「バンド・オン・ザ・ラン」の次のアルバム、「ヴィーナス・アンド・マース」は主にニューオリンズとロサンゼルスで録音され、アメリカ人ドラマー、ジョー・イングリッ

シュ(Joe English)が新たに加入した。結成当初は英国国内の大学で試験的なゲリラ・ライヴを行なっていたウィングスも、[xiv]この頃までには全英ツアーや欧州ツアーを成功させ、世界ツアーの準備は整っていた。ウィングスのライヴ活動については、商業誌でも多く取り上げられているので、[xv]ここでは詳しく触れないが、マッカートニーほどのスターでも、本人の発言によれば英国人にとって、特にアメリカでツアーを成功させるということは大きな意味を持っていた。[xvi]これは、1960-70 年代にビートルズを始めとするブリティッシュ・ロックが世界を席巻し、米国もその例に漏れなかったことを考えれば、非常に興味深い。[xvii]こうしてマッカートニー、レイン、リンダ、マカーロック、イングリッシュを正式なメンバーとして、1975 年 9 月、ウィングスの世界ツアーがスタートする。1976 年 5-6 月には全米ツアーを行ない、26 都市 31 公演で約 60 万人を動員した。この時のライヴの記録は、「ウィングス・オーヴァー・アメリカ(Wings Over America)」（日本での当時の LP タイトルは「ウィングス U.S.A. ライヴ！」）や映画「ロックショウ」として発売・公開された。

ウィングスの楽曲のほとんどはマッカートニーによって書かれたが、その作風は大まかに言って、明るく楽しい。ウィングスの代表曲である「心のラヴ・ソング(Silly Love Songs)」「あの娘におせっかい(Listen to What the Man Said)」はその典型である。マッカートニーは非常に器用なマルチ・プレーヤーなので、ヘヴィ・メタルの走りと言われるビートルズの「ヘルター・スケルター(Helter Skelter)」のようなハードな曲も勿論書けるし演奏もできるが、基本的に長調で前向きな内容の歌詞の曲が、マッカートニーの明るい人柄とよく符合する。一方、こうした明るい楽曲は、しばしばリズムやテンポが等拍で、いわゆるグルーヴ感とかオフ・ビート感といったものは感じられない。等拍なリズム、ハーモニーの重視という点で、マッカートニーの音楽の基本は、バロック音楽にまで遡れるヨーロッパの規範的な伝統音楽にある。[xviii]一方、グルーヴ感やオフ・ビート感というものは、黒人音楽に起因し、ブルースやジャズには欠かせない。マッカートニーの音楽に欠けていたとまでは言わないものの、ウィングスのサウンド面で、ブルースそしてハード・ロックの要素を強化したことは、メイオール・バンドやストーン・ザ・クロウズで鍛えられたマカーロックの、大きな功績だったと言えるだろう。特に「ロックショウ」後半、「愛の証(Beware My Love)」から「ソイリー(Soily)」まで続くハード・ロック感は、マカーロックの剝きだしの魂のようなギター演奏無しではあり得なかった。また、「バンド・オン・ザ・ラン(Band on the Run)」、「ハイ・ハイ・ハイ(Hi Hi Hi)」等で見せるボトル・ネックを使ったスライド・ギター奏法は、独創的で歴史に残る名演である。なお、ブルースやトラッド調の作風を加えたという点では、レインの貢献も大きい。一方、マカーロック作曲の「メディシン・ジャー」や「ワイノ・ジュンコ(Wino Junko)」では、マッカートニーの等拍なベース・リフ

が、アレンジをやや野暮ったくしてしまっているように感じられる。

ウィングス在籍中のその他の活動

マカーロックはウィングスで、「ウィングス・オーヴァー・アメリカ」を除けば、「ヴィーナス・アンド・マース」「スピード・オブ・サウンド(Wings at Speed of Sound)」「ロンドン・タウン(London Town)」の３枚のオリジナル・アルバムの制作に関わった。

既に述べたようにマッカートニーと仕事をすることは、世界中のウィングス・ファンにその名を知られ知名度が高まるのと同時に、常に「ウィングスのギタリスト」として扱われ、個人への注目度は相対的に小さくなる。元リード・ギタリストのマッカローと、ウィングスのアルバム「ワイルド・ライフ」と「レッド・ローズ・スピードウェイ(Red Rose Speedway)」にエンジニアとして参加したアラン・パーソンズ(Alan Parsons)はインタヴューで、音作りに対して他のメンバーへの要求も高く妥協を許さない等、マッカートニーと仕事をすることの難しさについて語っている。マッカートニーとリンダ以外で唯一最初から最後までウィングスと運命を共にしたレインについては、マッカートニーの望む通りに演奏し、「操り人形のよう」とした上で、ムーディ・ブルース時代のヒット曲である「ゴー・ナウ(Go Now)」以外何もしていない、と揶揄している。[xix]そして次のように述べている。「ジミー・マカーロックは自分のグループを結成したんだろう？　自分の個性を伸ばしたかったら、そういうことをやる必要がある。」[xx]

ウィングスの活動と並行する形で、1976 年、マカーロックは兄のジャック（ドラムス）、デイヴ・クラーク（Dave Clarke, ベース、ヴォーカル）と、「ジミー・マカーロック&ホワイト・ライン(Jimmy McCulloch and White Line)」というバンドを結成し、シングル「君をはなさない(Call My Name/Too Many Miles)」をリリースした。マカーロックは、若くして音楽業界で有名になったためか、あるいは伝えられる死因（ヘロインの過剰摂取とされている）のせいか、アルコールやドラッグにまつわるゴシップが絶えないが、実際は決して音楽への情熱を失わず、亡くなるまで挑戦を続け、音楽活動を停止したことは生涯一度もなかった。

ウィングス脱退

1977 年、「ロンドン・タウン」のヴァージン諸島での船上レコーディングの後、マカーロックはウィングスを脱退する。続いてドラマーのイングリッシュもバンドを離れた。アメリカ人のイングリッシュはホーム・シックになったということである。[xxi]マカーロック

の脱退理由については、一般的に音楽誌やインターネット上でのファンの書き込み等では、やはりアルコールやドラッグの問題が取沙汰されている。だがゴシップを探すのは簡単なので、ここでは、マッカートニー、マカーロックら当人達が語っている言葉を客観的に紹介すると共に、そこから真相を推察したい。

マカーロックはウィングス脱退後、スティーヴ・マリオット(Steve Mariott)率いるスモール・フェイセス(Small Faces)の再建に参加した。娘のメアリー(Mary)がインタヴューする「夢の翼～ヒッツ&ヒストリー(Wingspan)」(2001)というDVDの中でマッカートニーは、マリオットが電話をして来て、マカーロックは自分達のバンドに参加することになったからウィングスを辞める、と伝えたと語っている。だがマッカートニーは良くも悪くもマスメディアに見苦しい事を話さない傾向のある人物で、またこの時、マカーロックが亡くなってから既に四半世紀が立っており、マッカートニーには自分の都合の良いように歴史を書き換えることのできる可能性があったことを考慮しておきたい。

ウィングス脱退後のインタヴューでマカーロックは、「ウィングスで自分は、実質、スタジオで主に仕事をする雇われミュージシャンだった」と語っている。[xxii]だが彼はライヴでの即興性だけではなく、非常に高い演奏技術を持っており、「ロックショウ」を見てもわかるように、「マイ・ラヴ」や「メイビー・アイム・アメイズド(Maybe I'm Amazed)」のスタジオ盤でマッカローやマッカートニーが弾いたギター・ソロを正確に再現しつつ、なおかつ彼自身の素晴らしい個性と魅力によって、オリジナルの演奏者以上の表現ができる大変優れたギタリストだった。しかしマカーロックがスタジオでの仕事を嫌っていたのは既に述べた通りで、それはマッカートニーの「ジミーは、いつもコンサート・ツアーに出てなければ満足できないたちだった」という言葉に裏打ちされる。[xxiii]「ロンドン・タウン」のレコーディング作業の後、マッカートニー夫妻に長男ジェームズ(James)が誕生したことも、脱退の動機となったようである。マカーロックは上述のインタヴューの中で、「再びツアーに出るまではしばらく時間がかかると思った」と述べている。[xxiv]これについてはイングリッシュの妻も同様のことを述べており、[xxv]またマッカートニー自身、「今年一杯ツアーの予定を入れなかったのはリンダに子どもが生まれるということが理由だった」と語っている。[xxvi]イングリッシュの妻はまた、「ポールがバンドを自分の思う通りにしようとするので、窮屈に感じていたのではないか」と述べている。[xxvii]マッカートニーが完璧主義者のハード・ワーカーであり、共同作業者にも高いレベルを要求することはよく知られており、これは先述のパーソンズのインタヴューでも見た。だが一緒に仕事をする者には厳しいかもしれないが、それがマッカートニーが今日に至るまで作品の高いクオリティを保ち、一線で活躍し続けてきたことの原動力であることは否めない。マカーロックはウィングスに加入する前から、「難しい性格」と言われて来たが、[xxviii]マッカー

トニーもまた一緒に仕事をするのに容易な性格では決してない。

若いマカーロックの素行に問題はあったかもしれないが、[xxix]彼自身は「自分は友好的に別れたし、気を悪くした人は誰もいないと思う」と述べている。[xxx]そしてマッカートニーも、「ジミーもジョーもちゃんと仕事はやり終えてからやめた」「僕はジミーとジョーがいたウィングスは最高だったと思うし、彼らの演奏力は申し分なかった」「もし僕らが今すぐコンサート・ツアーをしなければならないとしたら、僕は多分、その間だけジミーとジョーを呼び寄せるだろうけど、今のところツアーは考えてない」と語っており、[xxxi]マカーロックとマッカートニーの不仲説ばかりクローズアップされるなか、この発言は注目に値する。[xxxii]さらにマッカートニーは、「ジミーはハードロックをやりたかった」とも述べており、[xxxiii]これは彼の楽曲がポップス路線中心であるのに対し、マカーロックの音楽は違う方向にあったことを裏づけている。

その死まで

「78 イン・ザ・シェイド(78 in the Shade)」(1978)というアルバムに参加しただけで、マカーロックはスモール・フェイセスもすぐに脱退してしまう。その後、ワイルド・ホーセス(Wild Horses)を経て、1979 年、ミラー・アンダーソン(Miller Anderson)、元ストーン・ザ・クロウズの卓越したキーボード奏者リーヒ、チャールズ・トゥマハイ(Charles Tumahai)らと、デュークスを結成する。同名のアルバムが発売されたのは、マカーロックの亡くなるわずか前週のことだった。アルバムに収められた曲のほとんどは、アンダーソンとリーヒによって書かれたが、マカーロック作曲、元ストーン・ザ・クロウズのドラマー、アレン作詞による 80 年代ポップス・ロック調の「ハートブレーカー(Heartbreaker)」も収録された。

マカーロックは 1979 年 9 月 27 日木曜日、ロンドンのメイダ・ヴェール(Maida Vale)の自宅で亡くなっているのを兄のジャックに発見された。発見の翌 28 日はディングウォールズ(Dingwalls)で、デビュー・コンサートが行なわれるはずだった。この週、デュークスのメンバーはライヴに向けてリハーサルに励んでいたが、発見前の 2 日間、マカーロックが姿を見せなかったため、兄が心配してドアを破ってアパートに入ったのだった。

マカーロックの死因については、一般的にヘロインの過剰摂取ということになっている。だがここでは、当時の新聞に掲載された記事も紹介しておきたい。10 月 6 日付の葬儀の告知記事によると、この日の時点で検死結果は確定されず、10 月 24 日まで延期された。[xxxiv]更に 11 月 10 日の記事では、結果は、「体内からアルコールと大麻を検出、死因はモルヒネ中毒」で、「第三者の関与が疑われる」というものだった。ヘロインはモルヒネか

ら作られモルヒネはアヘンから作られアヘンはケシの実から作られるのであり、おそらくこの辺りから死因がヘロインの過剰摂取と言われるようになったのではないかと筆者は推測している。大麻は全く別の植物である。記事の中で兄（「ジョン(John)」になっている）は「ジミーはハード・ドラッグは決して使わなかった」と述べている。[xxxv]

遺体発見の翌 28 日付の新聞にマッカートニーの、「彼は偉大なギター・プレーヤーだった。とても、とても悲しい。」というコメントが掲載された。[xxxvi]マカーロックの遺体は 10 月 6 日に、ワンステッド(Wanstead)で荼毘に付され、遺灰はスコットランドの祖父母の墓の元に撒かれた。マッカートニーの他、ザ・フーのケニー・ジョーンズ(Kenny Jones)、ビーチ・ボーイズ(The Beach Boys)ら大勢がその死を悼んだ。[xxxvii]

結び

ドラマーとして短期間だけウィングスに在籍したブリトンは、かつて次のように述べた。「ウィングスというのは奇妙なバンドだ。ミュージシャンの視点から見れば、名誉だけど、キャリアの点から言えば、気違いじみている。どんなに優れていても、常にポールの影になってしまうのだから。」[xxxviii]

サンダークラップ・ニューマンのまだあどけなさが残る少年ギタリストして注目を浴びたジミー・マカーロックは、着実に人気と実力を身につけ、ジョン・メイオール・バンドやストーン・ザ・クロウズを経て、1974 年にウィングスに加入し、英国だけではなく、世界中でその名を知られるようになった。と同時に、生涯、「元ウィングスのギタリスト」として、その名を語られることになってしまった。更に、ウィングスで唯一リード・ヴォーカルを務めた「メディシン・ジャー」と「ワイノ・ジュンコ」は、前者がドラッグ、後者がアルコールについての歌だったため(“Wino Junko”=“Wine Junky”)、ドラッグが原因とされる死を連想させ、その評価に暗い影を落とした。ただしこの２曲は、元ストーン・ザ・クロウズのドラマー、アレンの作詞によるものであり、マカーロックが担当したのは作曲である。そして「メディシン・ジャー」は「アンチ・ドラッグ・ソング」であると、マカーロック自身は語っている。[xxxix]

「ロックショウ」のリマスタリングは、リンダとマカーロックに捧げられており、マッカートニーは映画冒頭の特別メッセージで、「ジミーは偉大なギタリストだった」と述べている。基本的に等拍なリズムのポップス中心で、グルーヴ感の無いコンヴェンショナルな伝統的西洋音楽の正統な継承者であるマッカートニー／ウィングスの音楽に、ロックの要素を強化したのは、ブルースが基本のマカーロックの功績である。マッカートニーの音楽性との違いについては、今回は緻密な楽譜やコード研究を行なうことが間に合わなかっ

たので、今後の課題とするが、本論文は、生きていればエリック・クラプトンやジミー・ペイジ(Jimmy Page)と並ぶほど人気と実力を得ていたのではないかと惜しまれるマカーロックの人生と音楽について、主に同時代の新聞記事を元に、特にマッカートニーとの関係において、これまであまり語られて来なかった部分に焦点を当て、再評価しようと試みた。マカーロックのギターは、確かな基礎と技術に裏打ちされながら、決して型にはまることも安全地帯に留まることもなく、その魂のこもった演奏は聴く人の心を打つ。本論文が、夭折したこの天才ギタリストの知られざる生涯と音楽に、光を当てる一助となれば幸いである。

＊使用した新聞記事の大部分は、大英図書館で複写したものである。また本論文の執筆にあたり、膨大な資料や情報の収集と提供を行なっていることで知られ、現在、マカーロックの伝記を執筆中の Paul Salley 氏にこの場を借りてお礼申し上げる。

1. ピート・タウンゼントと
(Photo Courtesy of W. McGowan and F. J. Quin)。

2. "One in a Million: Double Sight, The Complete Recordings"アルバム・ジャケット。

Mark Plummer reports on the return to action of STONE THE CROWS, featuring new guitarist Jimmy McCulloch

Jimmy Crow

3. ストーン・ザ・クロウズでのマカーロックのデビュー演奏を伝える記事(*Melody Maker*, 1972 年 7 月 1 日)。

Jimmy joins Blue

JIMMY McCULLOCH, guitarist with Stone The Crows until their split two weeks ago, is to join Blue, the group formed by ex Marmalade songwriter and guitarist Hugh Nicholson.

FACES NAME NEW BASS MAN

Ex-Free man TETSU YAMAUCHI is to be the Faces new bass player. He replaces Ronnie Lane who quit the group last week after their American tour.

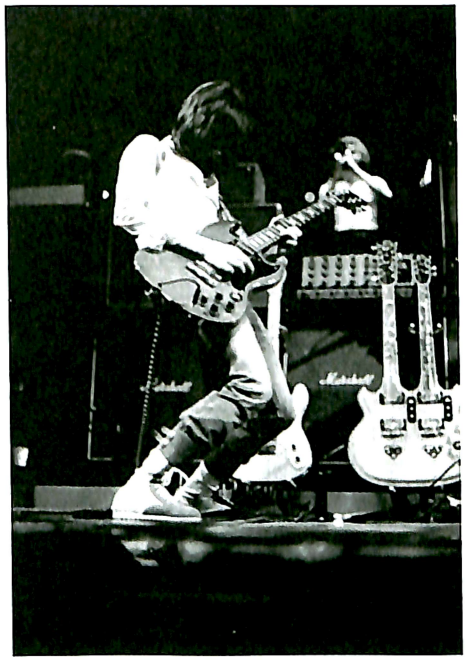
Japanese-born Tetsu (27) will make his debut with the group at the Sunderland Empire on June 1—Other Faces concerts at the Sunderland Edmonton on June 3 and 4 as well as June 9 have sold out, but an extra concert has been fixed for June 6.

JIMMY McCULLOCH ex-Crows joins ex-Marmalade

Fay

Vaugh Monro dies

4. マカーロックのブルー加入を伝える記事(*Melody Maker*, 1973 年 6 月 2 日)。
片隅に日本人ベーシスト山内テツのフェイセス(Faces)加入を伝える記事が見える。



5. 「ロックショウ」より。

6. デュークスのアルバム発売を知らせる広告(*Melody Maker*, 1979年9月15日)。

Pop man is found dead

JIMMY McCULLOCH the guitarist who backed former Beatle Paul McCartney on many of his hits with the Wings group, was found dead yesterday.

His body was discovered by his brother, who broke into Jimmy's flat in Maida Avenue, Maida Vale, London, NW, after he had failed to turn up for rehearsals with another group.

Contract

McCulloch, who played with Wings on Silly Love Songs and Let 'Em In, was due to make his first appearance with his new group, The Dukes, at a London club tonight.

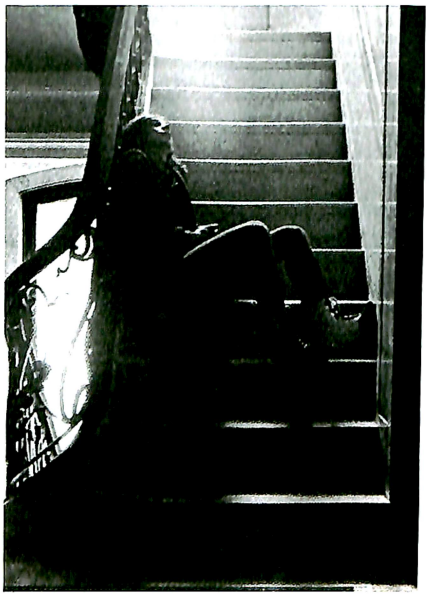
He left Wings for a solo career in 1977.

Recently he signed a contract with American recording company, Warner Brothers, and The Dukes' new album was release only last week.

Born in Clydebank, Scotland, McCulloch started playing the guitar when he was 11 years old. He had his first hit with Thunderclap Newman's Something In The Air, and appeared on Top Of The Pops when he was only 18.

McCartney said last night : 'He was a great guitar player. I am very, very sad.'

7. 死亡記事(*Melody Maker*, 1979 年 9 月 28 日)。



8. 階段に腰掛けるマカーロック(Photo by Aubrey Powell. "Hands Across The Water: Wings Tour USA"より)。

注

[i] *Melody Maker*, 1972 年 11 月 4 日。
[ii] *Mirabelle*, 1970 年 3 月 28 日。
[iii] *Melody Maker*, 1972 年 11 月 4 日。
[iv] ロンドンの、ライヴ・ハウスが多いデンマーク通り(Denmark Street)の Tin Pan Alley という店で会ったことを、マカーロックはしばしば語っている。(*Melody Maker*, 1974 年 11 月 30 日他。)
[v] 曲のタイトルは当初、"Revolution"だったが、同時期にビートルズの同名曲が発表されていたため、"Something in the Air"に変更された。
[vi] *Melody Maker*, 1974 年 11 月 30 日。
[vii] 「スタジオでの作業は死ぬほど退屈」(*Record Mirror*, 1976 年 8 月 14 日)。マカーロックは同様の発言をたびたび行なっている。
[viii] 「メイオールの息子くらいの若者を見て初めは笑みを浮かべていた観客も、数小節の激しく独創的なギター演奏の後は呆気にとられた。」(*Melody Maker*, 1971 年 10 月 23 日)他。
[ix] *Melody Maker*, 1971 年 10 月 23 日。
[x] *Melody Maker*, 1972 年 7 月 1 日他。
[xi] *Melody Maker*, 1972 年 7 月 1 日。
[xii] *Melody Maker*, 1974 年 11 月 30 日。
[xiii] *Melody Maker*, 1973 年 6 月 2 日他。
[xiv] 大学でのライヴはストーン・ザ・クロウズも行なっており、特別珍しいことではなかったようである。
[xv] 日本の商業誌だけでも、『レコード・コレクターズ』(6 月号)、『クロスビート』(7 月号) 他、2013 年は数多くの雑誌がマッカートニー／ウィングスを特集した。
[xvi] 2013 年 6 月に全世界で同時公開された「ロックショウ」冒頭の、マッカートニーによる特別メッセージ。
[xvii] 例えば 1970 年代初頭のロック・ミュージカル「ヘアー(Hair)」では、主人公の田舎のアメリカ人青年が自分をクールに見せる目的で、自分はマンチェスター(Manchester)の出身だと言ったりする。
[xviii] ビートルズの名曲「ブラックバード(Blackbird)」はバッハに触発されて作られたことを、マッカートニーはライヴ等で語っている。
[xix] レインの公式ウェブ・サイトのホームページは、本論を執筆中の 2013 年 12 月現在も「ゴー・ナウ」が流れている。http://www.dennylaine.com/
[xx] *Melody Maker*, 1977 年 1 月 15 日。
[xxi] マッカートニー談。『クロスビート』2013 年 7 月号 (『ミュージック・ライフ』1978 年 1 月号の再録) 他。
[xxii] *Daily Express*, 1978 年 1 月 6 日。
[xxiii] 『クロスビート』2013 年 7 月号。
[xxiv] *Daily Express*, 1978 年 1 月 6 日。
[xxv] *Beatlefan*, 1978 年 12 月 19 日創刊号。
[xxvi] 『クロスビート』2013 年 7 月号。
[xxvii] *Beatlefan*, 1978 年 12 月 19 日創刊号。
[xxviii] *Melody Maker*, 1974 年 11 月 30 日、1977 年 1 月 15 日他。
[xxix] マッカートニー夫妻の長男ジェームズ誕生の数日前、スコットランドのマッカートニーの農場で、酔っぱらったマカーロックは生みたての卵 2 ダースを部屋の壁にぶつけ、大騒ぎを起こした、という話が伝わっている。(*Daily Mirror*, 1991 年 11 月 4 日。)

[xxx] *Daily Express*, 1978 年 1 月 6 日。
[xxxi] 『クロスビート』2013 年 7 月号。
[xxxii] 「マッカートニーは、ジミーについてあまり語ろうとしない。」（Ken McNab, "The Beatles in Scotland" Polygon, 2008）他。
[xxxiii] 『クロスビート』2013 年 7 月号。
[xxxiv] *Melody Maker*, 1979 年 10 月 6 日。
[xxxv] *Melody Maker,* 1979 年 11 月 10 日。
[xxxvi] *Daily Mail*, 1979 年 9 月 28 日。
[xxxvii] ジョーンズは、スモール・フェイセスにも在籍していた。またマカーロックは、ビーチ・ボーイズのカール・ウィルソン(Carl Wilson)がプロデュースした、リッキー・マーティン(Ricci Martin)のアルバム「ビーチト(Beached)」にセッション・ギタリストとして参加している。マーティンは有名俳優ディーン・マーティン(Dean Martin)の息子で、ウィルソンはリッキーの妹と結婚した。ウィングスのアルバムは、ビーチ・ボーイズと関係が深いキャピトル(Capitol)・レーベルからも出ているので、その縁かもしれない。
[xxxviii] *Melody Maker*, 1977 年 1 月 15 日。
[xxxix] *Melody Maker*, 1974 年 11 月 30 日。

Jimmy McCulloch: Untimely Death of a Guitar Prodigy

In the Light and Shadow of Paul McCartney

HIRANO Emiko

James "Jimmy" McCulloch was a Scottish musician born in Dumbarton in 1953. He started his musical career at the age of eleven. McCulloch first gained fame when he played lead guitar in the UK number one hit single "Something in the Air" in the band *Thunderclap Newman* in 1969 at the age of fifteen. McCulloch was at the time claimed to be "the youngest lead guitarist to have performed in a number one hit song in the UK." By the time he joined Paul McCartney's *Wings* in 1974 at the age of twenty-one, McCulloch had already played in different bands. Participating in John Mayall's band's European tour particularly influenced and developed his guitar skills and gave him direction as a blues player. Fruits of that experience blossomed when he joined and played in a Glasgow blues rock band *Stone the Crows* in 1972.

McCulloch is rightly accredited with having brought blues and hard-rock elements into *Wings* songs, most of which were written by McCartney, who is better recognized for light pop songs such as "Silly Love Songs" or "Listen to What the Man Said." In contrast to blues music, roots of which are found in black music with its rich variety of rhythms, McCartney's music, where equal rhythms and complex harmonies are rather dominant, can trace its origins back to traditional and conventional European music. A *groove* in McCulloch's guitar play, which *Wings* had somewhat lacked, infused blues and hard-rock aspects into the band. McCulloch also became known world-wide when *Wings* reached the pinnacle of fame after the band's successful world tour "Wings over the World" in 1975-76.

McCulloch left *Wings* in 1977. Since then, he has been mentioned mostly as an "ex-*Wings* guitarist" although McCulloch had already been fairly famous in the UK even before joining *Wings*. In addition, McCulloch's sudden death allegedly caused by drug overdose has cast a shadow over his life history. McCulloch was only 26 years old when he passed away in 1979.

McCulloch's contribution to *Wings* was enormous and he is best remembered for playing lead guitar in the band. However, in his own right, he was a brilliant guitarist and his style, bold play, unique sense, consistent technique and passion for music merit a large share of attention. I hope this article sheds light on the life and music of a great guitarist, who

should never be lost from the history of rock music.